

5 岩勝隧道

1 堂ヶ森

標高1,689m。石鎚国立公園内にあり、なだらかなスロープを覆う一面の熊笹、厳しい自然が作った白骨林など、大自然の雄大な景観は、県外からの登山客にも人気が高い。保井野の登山口駐車場から約3時間。

中間点のやや手前、“から池”を過ぎたあたりから、シャクナゲの群落が見られる。

2 鞍瀬溪谷

堂ヶ森に源流を発する鞍瀬川は、清流、奇岩、断崖、滝などが見事で、四季折々に変化する溪谷美が訪れる人を楽しませてくれる。特に秋の紅葉は目を見張るものがある。冬の雪景色、春の桜、初夏の葉桜の頃も捨てがたい。

カワセミ、ヤマセミ、カワガラス、アカショウビンなど野鳥の宝庫でもある。

3 夫婦滝

保井野集落から椿山の浅瀬を渡り、鞍瀬溪谷を2時間ほど上流に登ると夫婦滝がある。幅60m、高さ40m、左に雌滝、右に雄滝があり、この下滝に貝の口がある。通称・雌滝は数十条の白糸になる。一方、雄滝は豪放磊落、天より一気に落ち、瀑音轟き、七色の虹を創る壮大な滝である。（現時点では豪雨のため登山道が崩落。復旧計画進行中）

4 国内最大級のムクの木

保井野集落を離れ、相名峠道を400mほど行くと森があり、その大木の切り株の上に、3坪ほどのお堂がある。木村観音といわれているが、その境内に樹齢300年以上のムクの大木がある。根元の周り9.36m、樹高25mもあり、ムクの木としては全国でも最大級とのこと。

5 岩勝隧道

旧桜樹村の楠窪と旧千足山村の戸石の村境近くにある、複雑な岩層を削り抜いた幅3m、高さ4m、延長22mの旧丹原町内では唯一の岩の隧道。

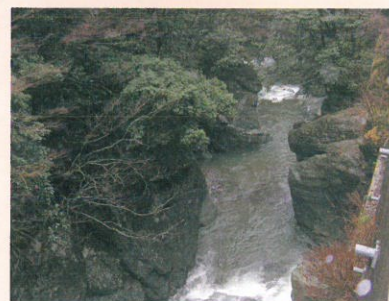
完成したのは昭和6年と伝えられており、当時は荷馬車で物資の運搬が盛んに行われ、地域住民の生活に欠かせない拠点の一つであった。



堂ヶ森



鞍瀬溪谷





磐根神社毛槍投げ奴



蜂ヶ森城址の地藏権現堂



千代之水と天然プール

6 磐根（いわね）神社毛槍投げ奴

磐根神社の秋季大祭の時の神輿渡御の先導は、舞獅子、その後に奴行列が続く。総勢24名（4人×6組）で、それぞれの槍を投げ渡し、独特の掛け声を掛け合ったり、片足跳びで前へ進んだりしながら行列は進行して行く。垂直に立った毛槍が宙を飛んで前へ投げ渡される赤坂流道中投奴行列である。

7 初笑い

鞍瀬の磐根神社で行われる元旦の恒例行事。年の初めに、腹の底から大音声で息の続く限りの大笑いを3回続けることで、明るく、活気ある一年を送れるようにという願いを込めた行事である。敗戦直後の昭和22年頃に、地元住民の安藤氏が打ちひしがれた地域の人々の元気を取り戻せればと始めたという。

8 蜂ヶ森城址

鞍瀬・峯にある。元弘6年（1333年）、建武の中興により鎌倉幕府は滅ぶが、残党は各地で反乱を起こした。伊予の国では、赤橋重時が恵良城（旧北条市）に立つが、南朝方の土居・得能の連合軍に敗れた。

しかし、いま一つの説が地域に伝わっている。重時は自害と見せかけ密かに城を抜け出し、鞍瀬村に立烏帽子城（面木山山頂）を築き、蜂ヶ森城など数箇所の属城を置いて、再び反した（建武2年＝1334年）。南朝方の得能、今岡、大祝の連合軍2,800余騎に攻められ、蜂ヶ森城に拠る重時の弟・藤丸が斬られ、孤立した立烏帽子城の重時も捉えられ斬首されたという。

その後、村人は重時らの霊を弔うため、この地に、文政4年（1821年）頃、地藏権現堂を建て、散在していた五輪塔5基、石燈籠6基、宝塔1基、墓碑1基を移転し祀ったという。

9 千代之水と天然プール

桜樹公民館正面の鞍瀬川の川辺に、千代之水と呼ばれる泉がある。四国に数多く残る弘法大師伝説の一つで、その湧水は涸れることがなく、美味しい飲み水として長く愛されている。

また、その前の川はたっぷりとした水量を湛える天然のプールになっており、夏にはホタルが飛び交い、その涼感を求めて市内外から多くの人を訪れる。

10 桜三里

東予地方と松山を結ぶ国道11号線、中山川溪谷に沿って続く桜街道。

代官矢野五郎右衛門源太が崩れやすい山中の街道沿いに、8,240本の桜、松を植えたことに始まり、その距離が三里あることからこの名がついたという。使役された囚人が「桜三里は源太の仕置き、花は咲いても実はなるな」と源太の酷使を恨んだという伝説も残っている。

ある時期、減少しつつあった桜を守るようと、地区公民館を中心に保存活動を行った結果、今では沿線の両側が桜の花で一杯になるほどの素晴らしい桜街道になった。

11 千原鉱山跡と千羽ヶ岳

東温市との市境近く、国道11号線沿いの千原地区では、古くから硫化鉄鉱・銅鉱を産していた。開鉱年代は別子銅山より古いとも言われる。明治37年、千原鉱山精錬所、大正8年には千原鉱山専用発電所（鞍瀬上城谷下流）が完成するなど、近代的な手法で採鉱を続けていたが、昭和35年、遂に鉱脈も尽き長い鉱山の歴史に幕を閉じた。

国道11号線と中山川溪谷を隔てた北側には、景勝地・千羽ヶ岳があり、“継子いじめ”^{ままこ}の話など、いくつかの伝説や民話が残されている。

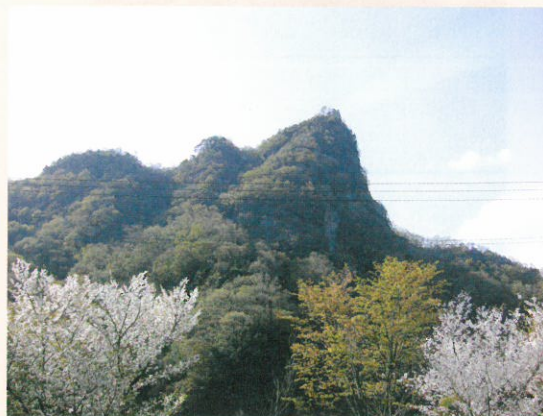
12 おんびきさん

いつの頃からか、白坂の笹ヶ峠の唐子川のほとりに、伊予の蛙^{かえる}石といわれる石が祀られている。蛙にそっくりな形をしており、咳、喉の病を治す神様といわれ、今昔を問わず参拝祈願者がある。

13 劈巖透水（へきがんとうすい）

安永9年(1780年)、当時の来見村庄屋越智喜三左衛門（後に改め「隆右衛門」）が、水不足に苦しむ農民のために、私財を投じ、自らも“のみ”を握って、約10年の歳月をかけて、寛政元年（1789年）に完成させたという。中山川溪谷左岸の岩壁を貫く通水路で、長さは96間（174m）。かなりの難工事で、「伊予の青の洞門」とも讃えられている。その業績は後世に伝えていかなければならない。

その後、明治19年に喜三左衛門の子孫にあたる、越智茂登太氏が5間（9m）の長さの隧道を増築、さらに大正2年には茂登太氏の発議により、大亀又蔵氏が監督になって、60間（109m）の水路を増設した。湯谷口から県道を下って来見橋を渡った左手に史蹟案内板、その小道に沿った左手に「劈巖透水碑」が建立されている。



千羽ヶ岳



劈巖透水



劈巖透水碑



衝上断層

14 衝上（しょうじょう）断層

中山川溪谷の来見橋下流に露出している断層。数千万年前の地殻運動によってできた中央構造線上の逆断層で、雲母片岩（黒色）の上に和泉砂岩（赤色）が押し上げられたものである。砥部町にも同様の断層が見られるが、市内には市之川や志河川等にも同じ露出が見られる。地質学上貴重な資料といえる。県指定の天然記念物である。

15 来見地区のサクラ「陽春」

丹原町来見にある、樹齢約90年、樹高約15mの桜の古木。1914年に近くに農業用水が完成したことを記念して、当時の中川村村長が植えたとされる。平成2年になって、旧川内町の高岡正明氏に発見された珍種で、「陽春」という名で登録された。淡いピンク色の花で花芯を包み込むような優雅な形をしており、時間が経過しても花芯が黒くならず、他の品種に比べて病気や胴枯れにも強いという特徴がある。市の天然記念物。枝一杯に花を咲かせ、周囲の田園風景と一体になり、のどかな風情を醸し出している。



陽春

16 関屋掘抜隧道（切抜水道）

山裾で水利の悪かった関屋地区には、関屋南谷の水を引用するための掘抜隧道（切抜水道）がある。

弘化元年（1844年）、玉井又兵衛、渡部伊勢八の主唱により、旦之原の地下を掘抜隧道として、南谷川の水を関屋の高台に引き水とした。隧道の長さ45間（約81m）、高さ8尺（約2.4m）、幅4尺（約1.2m）である。10町歩の灌漑に充てていたが、その後の改修により、現在は20町歩の水田を潤している。

この土木工事により高地で水稻栽培が盛んとなり、関屋地区では下流域に畑や果樹園、上流域に水田が拓けるという独特の景観を見せている。

17 志川掘抜隧道

志河川の水を志川地区の灌漑用水として利用するため、寛文5年（1665年）に公儀の依頼（銀5貫350目）を受けた三津屋の石工米屋三郎右エ門が、権現山下の岩石を切り抜く隧道工事等（長さ14間＝約25mの隧道と長さ21間＝約38mの岩石切割工事）に着手し、同7年（1667年）2月に完成させた。

その後、明治35年には地元の資産家野田峰次郎が私財200円を投じ、現在の位置（鳥越）に水道を移す工事等を行い、灌漑機能にあわせて水害の災いもなくしたといわれる。

今、支障なく日常生活を送ることができるのは、これら先人の残した功績のおかげであることを後世にも伝えていかなければならない。



志川掘抜隧道

18 志河川ダム

平成18年5月に志河川ダムの定礎式が行われた。平成20年3月竣工予定で、完成すれば、堤の高さ48.2m、堤の長さ117m、総貯水量130万 m^3 の巨大な農業用ダムになる。灌漑面積は1,090haで、道前平野全域の農業用水を安定的に供給できるようになることが期待される。

また、国道11号線からすぐ近くにあることから、気軽に訪れることのできる親水空間として、市民の憩いの場となるはずである。

19 志川橋

現在の市道が国道11号であった頃、昭和6年5月に竣工した、歴史を感じさせる風情のある、長さ38.1m、幅6.1mのアーチ橋。

20 越智茂登太頌徳碑

明治から昭和にかけて約40年間中川村村長を務め、へきがんとすい劈巖透水の完成をはじめ村政の発展に尽力した。その間県会議長に任ぜられるなど、県政の振興にも貢献し、地域の産業を興した（周桑バス会社・製紙会社・林業・畜産等）。自治、産業振興の功績に対し、九十余回にわたり感謝・表彰されるとともに、勲六等従六位を追賜されるなど、地域発展の功績は住民の誇りとする人物である。

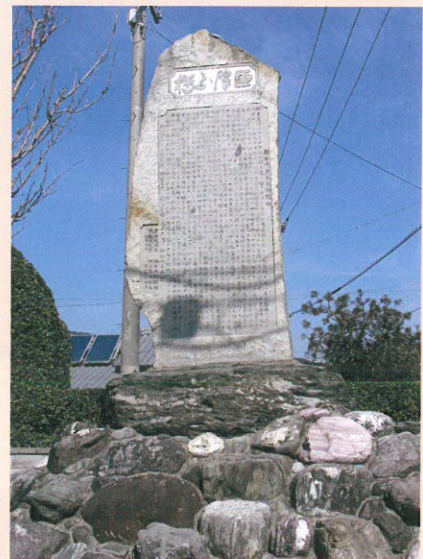
21 石経・立石の常夜燈

市内にいくつか残る、金毘羅街道脇に建てられた常夜燈で、俗に金毘羅燈籠と呼ばれ、そのうち石経に残るものは、高さ4.5mの花崗岩造りである。「万延元年（1860年）申初冬、発願主渡部半右衛門」とあり、他に有志の連名がある。下に「右さぬき道」の道標が立つ。

同じような常夜燈が関屋にも残っている。



志川橋



越智茂登太頌徳碑



石経の常夜灯



関屋の常夜灯



関屋川堰堤

22 関屋川堰堤

典型的な天井川で枯川である関屋川は、古来から長雨のたびに氾濫し、流域の来見や石経は毎年のように洪水の被害を受けてきた。その被害を食い止めようと、スイスなどで研修を受けた技術者の設計・指導と、地域農民の村をあげての参加協力によって、明治期から断続的に砂防堰の工事が行われた。結果、100年が経過した今でも、洪水被害防止機能を十分果たし得る堰堤が残っており、その規模や設計技術の面でも注目に値する歴史的な建造物となっている。

僅か2~3kmの間に連続する多くの堰堤と扇状地の上流部が織り成す独特の風景も見ごたえがある。



志川の大楠

23 楠伝説

志川地区の田の中にそびえる大楠。昔は貧乏な人の願いを聞いて、お金やお椀を貸してくれていたというが、不実の人があり約束を守らなかったため、今は何も貸してくれなくなった。各地に残る椀貸し伝説の一つである。

古墳跡とも言われる。

24 日吉神社

祭神は^{おおやまくひのかみ}大山咋神、明治44年に9社を合祀。社宝として^{しんきょう きん}神鏡3、^{べい}金幣1、^{むなふだ}棟札9がある。棟札の中には、天正8年（1580年）のものもあり、旧丹原町のものとしては最も古いものの一つである。寺尾の庄屋臼坂氏が奉納したものが多く現存しており、鳥居は延享4年（1747年）、狛犬は天保4年（1833年）、神鏡は宝暦2年（1752年）、金幣は寛文元年（1672年）のものである。

本殿は明治19年再建、拝殿は最近改築された。



安養寺

25 安養寺

明徳地区にある、真言宗高野派の古寺。寺伝によると延暦13年（794年）創建とあり、古い由緒ある寺で、伊予河野家累代の祈願所であったと伝えられるが、正確な記録はない。本尊は阿弥陀如来（平安末期の作と推定される）、脇仏は毘沙門天と十一面観音。また古い仁王像があり、戦国時代に兵火にかかって焼けたという傷が残っている。

現本堂は安政年間に修復したもので、庫裡には小松藩3代藩主^{くろ}柳直卿公^{なおあきら}の扁額がある。昭和29年に鐘楼が、昭和60年には仁王門が完成した。